

「下種の期間」～土壁に咲く花を夢見て～

第6回 大工と雀は軒でなく 左官と鶯はちりで遊ぶ

所属 建築研究所
主任研究員 水上 点晴

1923年9月1日に発生した関東大震災が、まもなく100年を迎える。震災よりもその後の火災による被害が甚大であり、特に、飛び火による同時多発火災が、消防活動の大きな妨げになったと言われている。この再現実験を行うため、当時の瓦屋根について調べてみた。当時の論説を引用すると、「東京の普通家の瓦屋根は練り土に瓦を貼り付けて順に並べたのみである。そして最後の軒廻りの瓦だけ屋根板に結んである丈である。これでは地震で揺すられると土ごと滑り落ちるのは定まったことで、その後に露出した燃焼しやすい下地より延焼し・・・」とある。現在の瓦は、滑落防止用に裏に爪がついていて、屋根板に打った棧に引掛ける棧瓦葺きが主流であるが、関東大震災は、この流れを決定的にした契機であったそうだ。

このように災害は、技術革新のきっかけとなることも多いが、この技術の伝播は、割合狭いエリアに限られていたようである。土をかませた屋根のむくりを好む京都、土の断熱性を重視する滋賀、凍害を防ぐための高温焼成の副作用―ねじれを殺すために土を有用する岐阜など、理由はさまざまであるが、関西では1995年の阪神淡路大震災まで、土葺きが行われていたとの証言がある。全国的にも、瓦が工業製品化される過程で失われていったが、昭和30年代までは、八百屋や鍛冶屋と同様、どの村にもだるま窯を用いて、現地の土をタタラでひいて成形した瓦を焼く瓦屋があった。そうした瓦は不揃いで、後世の土練機&プレス成型で一体化が可能となった爪も無く、馴染みの土は欠かせないものであったそうだ。そして、瓦屋とは製造を専らにしていたのが本来で、葺き師は、土の扱いに慣れた左官屋が兼業していた地域も多かったそうである。専門分化が進んだ今日、忘れ去られた屋根と左官のつながりを想起させる1



写真 大正時代の土葺き瓦屋根の再現

つの例を紹介したい。そう、左官は壁を塗るだけに飽き足らず、壁をよじ登り、屋根に跋扈していた時代があったのである。

前述の地震で落ちる瓦は、そのように計画されていたと見る節もある。瓦を落とすことで身を軽くして、構造体の崩壊は免れるという考えである。土壁の場合も同様の考えで、竹小舞を支えるえつり竹は、差し込むだけで、構造体とは縁を切っている。度々起こる小さな揺れでは亀裂を生じさせないための遊びを持ち、それを超えるいざという大きな揺れでは、壁が地震エネルギーを吸収して崩れることで、構造体の崩壊は免れる。この遊びは、柱に開けた穴の深さで調整する場合もあれば、柱に打ち込んだ竹釘に、篠竹を差し込んだり、縄で結わえるだけで調整することもある。この竹釘を金沢ではウグイスと呼び、富山ではスズメと呼ぶらしく、それだけで優雅なあるいは野趣あふれる土壁を想像することができる。更には、茶道の茶箱の点前で、器据と呼ばれる木の板の上に、茶筌を立てる為の転び止めとして、板に差し込む竹釘をやはりウグイスと呼ぶ。いずれも用途を同じくする竹釘を指すため、起源は一に帰すると思われるが、どの順番にこの技術／名称が伝播したのだろうか？

ウグイスの名を冠した建築用語で、もう1つ思い当たるのは、二条城や知恩院で知られているウグイス張りである。廊下を歩くとキュッキュッと音が鳴るのが特徴で、この音がウグイスの鳴き声に似ていると説



写真 階段下のウグイス張りの床

明されている。本当だろうか？ウグイスの鳴き声はホーホケキョである。谷渡のケキョケキョケキョという声もあるが、鳴き声だけで言えばヤモリの方がまだ床鳴の音に近いように思われる。このウグイス張りを経年劣化ではなく、我が家で人工的に試みた結果、釘頭が見えないように、両端がとがった釘を、下穴をあけて根太に差しこみ、床板を上から打ち込むことで鳴ることが分かった。両端がとがった釘を差し込んでいるだけなので、固定する力が弱く、床板の上下で釘と穴がこすれて摩擦で鳴っているのである。しかし、依然として名前の由来が判然としない。

ヒントとなる鍵が、福岡県うきは市から大分県日田市にまたがる、杉皮葺きの現場に落ちていた。この地方独特の杉皮葺きとは、茅葺の表面に防水効果の高い杉皮を重ねていく屋根であるが、この杉皮の留付けに用



写真 杉皮葺きの屋根

いる竹釘を「ウグイス釘」と呼ぶ。語源は不明とされたものの、後に檜皮葺きの現場でも同様の呼び方をしていることを確認した。「ス」が付かないウグイスは鳥ではなく、全国の河川でもっとも普通に見られた魚で、昔は甘露煮などにしてよく食されていた。特筆すべきは pH 4 以下の強酸性でも生きられることで、生息域の拡大につながっている。ここで閃いた。酸性の土の中、

雨ざらしの屋根の上でも腐食しない竹釘を、ウグイスにあやかって名前にしたのではないのだろうか。その両端がとがる竹釘の形も、スマートな体系をしているウグイスの姿と見事に共通する。

この想像を元にすれば、伝播の経路は、ウグイス釘の使用量の多さから見て、杉皮葺きや檜皮葺きなどの植物性の葺き師から始まり、同業の瓦の葺き師へと伝わり、土を媒介としてこれを兼業した左官仕事に展開されて、えつり竹のウグイスへ。この段階で既に本来の語源は失われていたと見るべきである。更には他職種の床のウグイス張りや、地域的な広がりを見せる中で、鳥の名前つながりで変化した富山のスズメへと波及していったと思われる。そして茶道のウグイスについては、職人は茶道を学ばずんば仕事を不得と言われるほど、家づくりに茶道の美学が浸透した金沢で、左官職人からもたらされたのではと想像する。

その職種だけに通用する隠語を使うことで、値段や等級など、お客に知られたくない内容も、目の前で話が出来た。既に良く知られているものでいえば、寿司屋のカッパやムラサキ、デパートでの2番入りますといった類のものであり、大工、左官、石工と、建築に関係のある職種で共通だったのは、数の符丁、本¹ロツソ²レタ³ヨ⁴山木⁵であらうか。「こんな角材が一丁⁶レー⁷ツ⁸ーだよ (5300円)」といった風に使う。これらの符丁言葉が使われなくなって久しい。最大の原因は、尺貫法を廃止して、メートル法にしてしまったことにあるようだ。このウグイス釘なんぞも、葺き師と左官が、土を媒介として兼業されてきたこと、同じ現場に出入りする近接他業種の職人が、語源を知らぬばかりに、似た言葉と勘違いして伝えた例もあったことなど、左官という職種の歴史的な背景を忍ばせる一例である。また想像力を喚起させ、分かった者にクスっとしたおかしみを与える、こうした名づけのセンスは、逆説的ではあるが、職人が自らの領分を超えた異業種での符丁言葉に常に耳を澄ませ、職人としての深い観察眼そして愛情を、周囲を取り巻く環境や動物そして道具にまで向けていたことを、今に伝えてくれるのである。あらゆる職種が長い時代をかけて伝えてきた味のある言葉が、透明性や分業化、グローバル化の名の下に、失われてしまわないことを願うばかりである。